

神の子イエス・キリストのことを、わたしたちは、父なる全能の神と比べて一段低い存在と、どこかで考えてしまっていないでしょうか。ですから「十字架に磔られた神」という表題は、ちょっとインパクトがあるのではないかと思うのです。やはり神様というのは目に見えない天の王座に座しておられる全知全能の神でなくてはならない。けれども聖書はそんな私たちの神様観を見直すことを求めています。私たちは、全知全能の神という抽象的な観念ではなく、神様ご自身が「わたしはこういう者だよ」とご自分を差し出されたそのままに、神様を理解しなければなりません。それがすなわちイエス・キリスト、十字架に磔られたお方なのです。

このイエス様は、全知全能と似ても似つかぬ姿で登場されました。貧しいベツレヘムの飼葉桶の中に生まれ、誤解と苦難の人生の中で民衆の深い失望と怒りを買って十字架に磔られて死んだのです。全くの無力のまま、業績という人間的な見方をするならば、失敗といってもよいほどの人生でした。しかしこのイエス様の無力な姿を通して、神とはいかなる方であるのかをもう一度学び直す機会としたいと思うのです。

そしてもう一つ、神を知ることには人間自身を知ることにつながります。イエス様は「あなた方の天の父が完全であられるように、あなた方も完全なものとなりなさい（マタイ 5:48）」と言われましたが、真の神の完全とは何かを知ることが、私たちがただやみくもに全知全能を目指すのとは違うものを目指すことにつながるからです。

今日の聖書の箇所には、十字架という最も暗いおぞましい外観の中に、神の真実が見え隠れしています。外面的にはサタンの完全な勝利が語られています。しかし、そのサタンの勝利をもってしても、けっして潰えることのなかった神の勝利が潜んでいます。

はじめにキレネ人シモンという田舎者が登場します。彼の息子たちは初期のキリスト教世界では名の知られたキリスト者であったようですが、信

仰へのきっかけは、たまたまその場に居合わせた彼らの父親が、ローマ兵の命令で、弱り切って動けなくなったイエスの代わりに、十字架を運ばせられた偶然の不運によるものだったようです。信仰へのきっかけは、人間の知性や意志によるものではなく、全くコントロールの及ばない出来事に翻弄される中で与えられるもののようなのです。運命に翻弄されているのは一般の民衆もおなじでした。その中には慣習として死刑囚に付き添うエルサレムの泣き女たちもいました。民衆は自分たちの勝手な期待とそれが叶わないと知ったときの失望感に由来する衝動的で無責任な群集心理によってイエスの磔刑を求め決定が下されてしまいました。つい昨日まではイエスを讃えていた群衆がです。イエスは泣き女たちに——そしてそれは民衆全体に対しての言葉でもあるのですが——次のように言われました。「わたしのために泣くな。自分たちのために泣け。」そして預言の言葉を引用され、「生の木」つまり罪のない者でさえ、このような目に合うのなら「枯れた木」つまり罪人は燃え盛る裁きの炎にはひとたまりもない、と言われたのです。イエス様も悲しんでおられました。しかしそれは泣き女の白々しくも騒がしい嘆きではなく、本物の胸の痛みでした。イエス様が見ておられたのは、ご自分の不幸ではなく、人の目には隠されている人間の悲惨です。怒りに燃えた意地の悪い報復ではなく、心からの共感・共苦の悲しみです（ホセア 10:8;11:8-9 を読む）。続く箇所も、旧約聖書を次々に思い出させます。イザヤ書「罪人の一人に数えられる」（53:12）、詩編 22 編「着物を分け…くじを引く」（詩 22:19）、自らを助けよと嘲られる（詩 22:8-9）、酔を飲ませようとされる（詩 69:22）。こうした情景が繰り返される中で、イエス様の祈りが 34 節に付け加えられています。（カッコ書きになっていますのは、この祈りが欠けている写本があるからです。聖書は手書きで転写され伝えられた写本が複数残っているのですが、筆写の時抜け落ちたのではないかとか、後代の加筆ではないかなどと諸説あるので、カッコ書きに

なっているのです。) これまでもそうであったように一貫して人々のために嘆き祈るイエス様の姿勢が貫かれています。

こうして最終的にはイエス様は息を引き取られるのです。ここに全能の神は登場しません。議員たちやローマ兵の嘲りは、自分が全能の神だというのなら、その業を見せて見ろというものでした。それらへの答えはありません。まさに沈黙。生きている間、イエス様は、誰をも救っていないのです。もちろん病をいやしたり、教えによって慰め励ましたりということはなさいました。けれども魂の救いを、ただ一人として勝ち取っていません。結果や成果を出すという考えからすれば、ただ運命に翻弄されるだけの、まさに敗北、サタンの勝利にしか見えません。けれどもここに、いかなるサタンの勝利でも打ち消すことのできなかつたものがあります。それは方向性です。イエスがどこを向いておられたかということです。人々の救いという方向性だけは堅持しておられたということです。サタンもこれだけは潰すことができませんでした。イエス様にあきらめさせることはできませんでした。イエス様はその方向性において完全であられたのです。

神の完全はその方向性に現れる。この考えが私の頭に浮かんだとき、わたしには衝撃的でした。震災を経験して、神様はどうしてこのようなことをなさるのかと誰もが思いました。真なる神、善なる神が唯一絶対の神であるならば、震災の悲劇をゆるす神は善なる神だとはとても言えません。世界には様々な不幸があり悲惨があります。世界を造った神は義なる神なのか、神の御業は不完全なのか？という疑問が当然湧き上がります。けれどもこうした問いの大前提は、結果主義です。成果主義です。結果が良ければよいという神は、人間が作り出した神でしかありません。イエス様は人を救うという方向を向いているということにおいてぶれなかった、完全だったのです。そのことは多数現れている旧約聖書の引用によって証明されています。神様は人間を救うという方向性において決してぶれるお方ではない。ここに私たちの希望があります。私たちは救いへと向かっている

のです。そして(ここからが大事です)、わたしたちも、結果は出せなくても、神様のお褒めに与れるようなものは何もなくても、救いの方向を向いている限り 100%完全でいられるのです。結果主義を捨てましょう。今ここで救いを信じ待ち望む、その方向を向いている限り、サタンは私たちに手出しできないのです。サタンはありとあらゆることを仕掛けてくるでしょう。生活に行き詰まり、友の一言に傷つき、健康を害し、しまいには死をもって滅ぼそうとするでしょう。けれども、私たちが神を愛し友を愛する方向に向いている限り、結果ははるかに及ばなくても、そちらに身を向けるといふ、ただそのことだけはサタンも手出しできないのです。